

# 新しい認識を促す高校古文の授業 ——『徒然草』——

手代木 綾子

## はじめに

学習において「深い学び・対話的な学び・主体的な学び」がなされたかどうかは「学習者の内面に新しい認識が起ころこと」が証左となるであろう。では古文で実践する意義はどこにあるだろうか。

・ 古人の感じ方・考え方を自分のそれと比較するなどして、改めて自分の感じ方・考え方を客観的に把握し捉え直すことができる。

・ 古文に触れることで日本語についての考えを深めることができる。

・ 日本に流れる伝統的な価値観を自分の中にも見つけることで新しい認識を促し、自己を豊かにすることができる。

本稿は、この三点をねらいとして行った平成二十七年年度の授業実践である。ここで取り上げるのは『徒然草』一三七段「花

は盛りに」の前半である。この章段を取り上げるのは、「美意識」について述べられたものであり、日本の文化を端的に学ぶことができるからである。また、生徒自身の美意識との比較をさせることで主体的に学ぶことを意図した。

## 一 教材研究としての直近の文学研究の大切さ

中学校では二年生で『枕草子』『徒然草』を学ぶ。そして、高等学校では一年生で再びこの二作品について学ぶ。『徒然草』を初めて扱ったときに見られる共通の生徒の反応についてまず述べる。

『徒然草』について知っていることを挙げさせると、中高共に必ずと言っていいほど挙がるのが「吉田兼好！」という声だ。教科書脚注や中学生向け資料集では「江戸時代以降、吉田兼好という呼び名も広まった」とあり、高校生向け資料集<sup>②</sup>には、兼好を「兼頭」の子で「慈遍」の兄弟とする、『尊卑分脈』の「卜部氏略系図」が紹

介されている。

「吉田兼好」という呼び名は江戸時代に広まったものであり、近年の研究では小川剛生<sup>4</sup>氏の研究が注目される。小川氏は、兼好法師のこうした系譜と経歴を戦国時代の吉田兼俱の捏造であるとし、さらに、『正徹物語』七四段にある「兼好は俗にての名なり。久我<sup>5</sup>か徳大寺かの諸大夫にてありしなり。官が滝口にてありければ、内裏の宿直に参りて、常に玉体を押し奉りけり。」を重視し、

・卜部兼好は滝口の武士で後二条天皇ないし花園天皇に仕えた。

・その後、金沢貞顕の被官となった。

・貞顕の子顕助が仁和寺真乗院に入室したために、仁和寺関連の話が多い。

と結論づけている。

小川氏の研究の詳細は語らないにしても、吉田神社の神官ではないとする説を紹介すると生徒たちは興味を持つ。

また、「随筆」という言葉にも注意が必要であろう。生徒たちには「随筆」と言うより「エッセイ」と言ったほうが伝わるようなのだが、多くの生徒たちが現代のエッセイストを連想する。そこで、高校で一三七段「花は盛りに」を学習する場合には、次のことを強調しておくべきだろう。

・兼好法師は、職業として随筆を何作も書くようなエッセイストではないこと。

・二条家より古今伝授を受け、「和歌四天王」の一人であったこと。

## 二 授業実践

(一) 対象 北鎌倉女子学園高等学校一年特進クラス(二クラス)

(二) 日時 平成二十七年十一月～十二月の約十時間

(三) 教材 『徒然草』一三七段(大修館書店『国語総合 古典編』)

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「障ることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月のかたぶくを慕ふ習ひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。男・女の情けも、ひとへに会ひ見るをば言ふものかは。会はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深く、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしてみても、心あらん友もがたと、都恋しうおぼゆれ。

すべて、月・花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は闇のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えぬ、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のものには、ねぢ寄り立

ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

#### (四) 年間計画および単元の目標

平成二十七年度高一特進古文では、国語科学習指導要領にあるとおり、「思考力と想像力の伸長、心情を豊かにすること、言語感覚を磨くこと、我が国の伝統と文化の理解を深めること」を目標とし、さらに、次期学習指導要領や育成したい力を見据え、「自分なりに考えを持ち、交流する中で掘り下げて考え、それを述べることのできる生徒」の育成を目指した。

#### 単元の目標

- ①『徒然草』に述べられた美意識を読み取り、我が国の伝統と文化を理解する。「和歌」から『徒然草』、そして「能」へ、さらに現代へ続く美意識を理解する。能を生徒たちは五月にすでに鑑賞しており、また、最も日本の美意識の凝縮された表現方法でもあると考えるためである。
- ②自分の美意識を探り、絵や写真で表現したり、考えを文章にまとめたりすることで、自分のものの見方を捉え直す。
- ③英文との比較をすることで古文を深く理解し、且つ、日本語そのもののへの興味・関心を広げる。
- ④発展学習として、自分なりに課題を設定し、解決に向けて交流する。掘り下げて考え、また、それを自分の言葉で述べることができる。
- ⑤文語のきまりなどを理解し、内容を的確に捉える。

これらを(五)【1】～【5】の「ねらい」では「協働、アウト

プット、自己の思考の客観視、課題設定および解決、新しい認識」というキーワードで示す。

#### (五) 授業の詳細

##### 第一時～第三時

『徒然草』と兼好法師について知る。文章を読み、内容を捉える。

古典文法(用言の復習、助詞、助動詞)を学び、習得する。

##### 第四時～第十時(【1】～【5】)

※以下、毎時間、プリントに気付いたことや考えを記述する「学習の振り返り」をし、それをクラスで共有した。さらに他のクラスの意見も共有し、考えを発展させるようにした。

##### 【1】「情趣がある」とはどういうことだろう。

##### ・設定理由

本文に「垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。」「よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。」などがあり、第一三七段は「あはれなり」や「をかし」の状態とそうでない状態とを対比しながら述べている。しかし、「趣深い」「趣がある」などと現代語訳するだけでは生徒たちが本当にその意味を理解しているかどうかは甚だ疑問である。そこで、自分たちの持つ美意識について考えることで「趣」について理解を深めさせたい。

・ねらい 協働、アウトプット、自己の思考の客観視、新しい認識・授業方法

①自分の考える「趣があるもの」を写真や絵で示しながらプレゼンテーションする。

②クラス全員の発表をふまえて、現代を生きる私たちのものの見

方について、まとめる。また、他のクラスのまとめを知る。

### ③兼好法師の見方と対比して考察する。

#### ・授業の詳細

まず、①自分が桜の観賞で一番美しいと感じる時、②月の観賞で一番美しいと感じる時、③桜の観賞の仕方でもつともないと思う見方、をそれぞれ考えた。この段階ではまだ生徒の生活に根ざした深い物の見方を喚起することは充分できない。

そこで、次におこなったのは、生徒が生活の中から情趣あるものを探し、それが「より情趣ある状態」と「劣る状態」とを兼好法師のように比較して発表する試みである。生徒たちは一週間ほどかけて探し、その写真かイラストを一人二枚ずつ持ち寄り、書画カメラとプロジェクター一体型電子黒板を使って発表した。その数例を挙げる。

紫陽花 (T・H)

日向で咲く紫陽花より、日陰で咲く紫陽花のほうがよい。

ギター (R・A)

新品の私のギターより、ジョン・レノンのギターのほうがよい。

自転車 (M・H)

新品の時より思い出のある使い込んだ自転車のほうがよい。

月 (R・W)

全て見える満月より、ビルの間から見える月のほうがよい。

蛍光灯 (S・Y)

チカチカ点滅している蛍光灯より、元気な蛍光灯のほうがよい。

自分で探すのも楽しかったようだが、友人がどんなものを持ってくる

のか、非常に楽しみにしていたようである。ここに挙げた紫陽花から月までは兼好法師に近いものであると言えよう。しかし、こうした例は二クラスともに半数に満たなかった。そして「蛍光灯」の例から「現代人は便利なものがよい」という特徴があるのではないか」という意見が出た。

「発表後の生徒の考え」特に考えを深化できたと思われるものを挙げる。

・最近では新しければ新しいほど良いという考えが増えてきているように思える。現代の人々がひとつのものを大切に使うという気持ちが足りないからかなと思った。(R・K)

・現代人は見た目がきれいで完璧な感じのものを良いと捉え、兼好さんとは反対の意見をもっていると感じた。兼好さまはもう時代遅れなのだと感じた。(N・H)

・私のクラスは兼好さんとは逆の意見のほうがやや多かった。これは現代が洋風に変化し、日本の心・風情というものを重視しなくなってきたからだと思った。また、身の周りに日本を意識した素朴なものよりも、洋風でどちらかと言うとはっきりした派手なものが多いからだと思った。(S・Y)

・兼好さんの見方は、物を見てその物がここにあるまでのストーリーを感じる物を良いとする。でも現代人はその物の今だけを見る傾向があり、見たままできれいかそうでないか、便利かそうでないかで判断するところがある。(M・F)

以上のように、他の人の見方を知ったあと、生徒たちは自ら、クラスの傾向を捉えようとした。そしてさらに現代人の物の見方と兼好法師との比較へと考察を広げていった。

## 【2】兼好法師の美意識を探る。

### ・設定理由

教科書に掲載の第一三七段は前半のみであり、且つ兼好法師の美意識が述べられているのはこの章段だけではない。他の章段も取り上げること、考えを深めさせる。また、文学作品以外の例から考察を広げさせる。

### ・ねらい 協働、アウトプット、自己の思考の客観視、新しい認識 ・授業方法

①他の章段として、第七段、第八二段を取り上げる。共感できるところとそうでないところを記述し、発表して意見交換を行う。第七段は無常を述べた章段であり、これを踏まえた上でなければ第一三七段の「始め終はりこそをかしけれ」等々の理解が十分ではないと考えたためである。また、第八十二段は不完全の美を述べた章段で、第一三七段と同じく兼好法師が考える物事の望ましい状態について述べられているためである。

②文学作品以外の例（建築物等）を考えることで本文理解を深める。

### 第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにもものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何か

はせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出て交らはん事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。

### 第八十二段

「うすもの羅の表紙は、疾く損ずるがわびしき」と人の言いしに、頼阿が、「羅は上下はつれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそ、いみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりして覚えしか。一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、「物を必ず一具に調へんとするは、つたなき者のする事なり。不具なるこそよけれ」と言ひしも、いみじく覚えしなり。すべて、何も皆、事のとのほりたるは、あしき事なり。し残したるをさて打ち置きたるは、面白く、生き延ぶるわざなり。「内裏造らるるにも、必ず、造り果てぬ所を残す事なり」と、或人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の欠けたる事のみこそ侍れ。

〔第七段「あだし野の露消ゆるときなく」を読んだ感想〕

・私もそう思う。しかし、子孫の様子は見届けたい。（M・S）

・ずっと同じ世界だったらつまらないと思うし、変わるからこそ美しいというのに同感。（K・H）

・賛成。花も人も散つてしまふから美しいと思った。（R・K）

〔第八十二段「羅の表紙は」を読んだ感想〕

・未完成よりもきちんと完成したほうがきれいだと思う。（R・A）

・兼好法師の意見に反対。全て揃わないと知識が欠けたり、前後のつな

がりがわからなくなったりしてしまうから。(A・U)

・未完成のほうが美しい。それは曲や絵、彫刻など。サグラダ・ファミリアやミロのヴィーナスは美しい。しかし集める本などは揃っていないと嫌だ。(Y・K)

ここには、いくつかの意見を載せたが、それぞれの章段に対しての生徒たちの反応は大きく異なるものだった。第七段にはほとんどの生徒が同感したのに対して、第八十二段には、各クラス一名を除いては共感できないという結果だった。

そこで次は、Y・Kさんの意見「サグラダ・ファミリアやミロのヴィーナス」「曲や絵、彫刻」など、「未完成で美しいもの」を探した。インターネットで見えたものの一部を挙げる。

完成を目指している未完成のもの

サグラダ・ファミリア<sup>⑥</sup> (完成予想映像も併せて見た。)

意図せず、不完全になってしまったもの

ミロのヴィーナス

意図的に、未完成にしてあるもの

知恩院御影堂の瓦、陽明門の逆柱

心で見えるもの(第一三七段「さのみ目にて見るものかは」)

龍安寺石庭、西芳寺円窓から見た庭、足立美術館窓枠から見た庭園

「映像を見た後での意見」以下に三つに分けて挙げる。

心で見ることについて

・心で見るということは難しいことだと思った。心が綺麗でないと綺麗に見えるはずの景色も変わってしまうのかなと思う。(R・A)

・私は目で見ると思っていたけれど、ネットで見て、心で見えるのもし

いと思った。想像して景色を思い浮かべるのも楽しそうだ。(S・K)

・心の目で見るというのは想像力がないといけない。(A・S)

・心で見ることについて私も賛成。目で見えない真実も世の中にはきつとあるから。見えない所まで考えられる人になりたい。(E・N)

心で見ることと日本の文化について

・兼好さんのところから日本人のものの見方は変わってないのかなと思った。心で見ると何を何となく自然としているのだと思った。(H・M)

・心の目で見るとことは日本の大切な文化であると思う。日本には心で見ることこそ美しいと思えるものが沢山あると思う。(R・W)

新たな認識ができたもの

・私は今まで風景だけを見ていて、おそらく「目だけで見る」ことしかしていなかったが、兼好さんの見方を教えてもらって、いつもより奥深く感動した。(M・S)

・今までは見たい物だけを何の遮りもなく見られるのが良いと思っていましたが、他の物も視界に入ってくるからこそ本当に見たいものにより集中できると思った。今まではそういう見方をしたことはなかったけれど、これからはそういうふうにも見てみたい。(N・U)

・兼好さまの、未完成なほうが魅力あるという考えに同感し、私にもそういう気持ちが芽生えてきた。(N・H)

このN・Hさんは【1】では「兼好さまはもう時代遅れなのだ」と述べていたのだが、理解するだけでなく、同じ感じ方が「芽生えてきた」との感想を持った。文章を読んだだけの時は各クラス一名しか共感しなかった「未完の美」について、二クラスとも全員がその考えを

理解し、共感したり自分の中に新たな認識が生まれたりした。

従来はこのような場面で提示できたのはせいぜい資料集を使って限られたほんの一例か二例くらいであった。生徒の理解がぐんと進んだのは映像の力である。

さらに、「この未完の美という考え方は日本だけのものなのだろうか。日本に顕著に見られるけれども、サグラダ・ファミリアやミロのヴィナスのように外国の例はないのだろうか」とも投げ掛けてみた。生徒たちが最も共感したのはデイズニランドであった。その際、ウォルト・デイズニの言葉「Disneyland will never be completed. It will continue to grow as long as there is imagination left in the world.」を紹介した。また、読み取ってきた日本の美意識についても、『史記<sup>7)</sup>の「月満つれば則虧<sup>8)</sup>」に見られることも提示した。物があふれる環境の中で育ってきた生徒たちにとって、最も大事なものは想像できる力なのではないか。逆説的であるが、それを教えてくれたのは映像の力であった。

【3】徒然草を英訳で読もう<sup>9)</sup>。

・設定理由

第一三七段を英文で読むことで理解を深める。生徒たちにとっては日本語より英語のほうが理解しやすいのではないかと考えたためである。

・ねらい 協働、アウトプット、自己の思考の客観視、新しい認識  
・授業方法

①英語の授業において同じ章段を英文で読む。

②その後、英文と古文との比較を行う。

・授業の詳細

英語科の協力のもと、生徒たちは英語の授業でもドナルド・キーン氏による英訳文<sup>8)</sup>を読んだ。その後、古文の授業で一文一文、原文との比較を行った。

キーン氏は日本文学の理解が深いことはもちろん、もともと英語圏の初学者を対象にしている文であることから、教材としても適切であると考えた。そして、日本語である現代語訳より英訳のほうが生徒たちは理解しやすいのではないかと考えたからだ。たとえば「あはれに情け深し」は「these are even more deeply moving.」、「色好む」は教科書脚注には「恋の情趣を理解する」とあり、英訳では「such a man truly knows what love means.」、「またなくあはれなり」は「how incomparably lovely is the moon」、「心あらん友」は「a friend who could share the moment」と訳されている。

英訳を読んで気付いたこと・考えたこと

・日本人には当たり前、理解できると省略されていることが英訳文では丁寧に書かれているので、現代の私たちにはわかりやすい。(M・T)  
・英訳が工夫されていて色々な表現が使われていた。新鮮で面白かった。(N・U)

・完了の「ぬ」などを意識して英訳したり、英単語を使い分けていたりしたことに感心した。(A・M)

日本語・英語の性質について気付いたもの  
・日本語には間接的な表現が多く、英語には直接的な表現が多いと気付いた。(S・Y)

・古文を英語にしてそれを日本語に訳すことで日本と外国の文化の違いか

ら意味が少し変わってきてしまうことがわかった。例えば、「情け」は「愛」（原文「Love」）になっていて日本の男女の関係との違いを感じた。（A・N）

・日本語は「さのみ目にて見るものか」とあるように物事を直接的に言わず、少ない言葉で間接的に言うことで読者の想像力をかき立て、目だけなく心で感じられるように書いてある。だから読んだ人の数だけ解釈の仕方がある。Donald Keeneさんはとても上手に訳しているが、英語では読者の感じ方が一通りになってしまふと思う。（S・O）

このように生徒たちは「日本語の持つ性質」にまで考えを広げた。ただし、日本語の良さに気づけた一方、他の言語を否定するような意見に傾倒しないよう指導者は気をつけなければなるまい。

#### 【4】百人一首を分析し、共通点を探る。

・設定理由

歌人兼好法師が『徒然草』に述べた価値観の原点を歌の世界に見出せるか、また生徒たちが最も親しんでいる和歌として百人一首を比較教材とした。

・ねらい

協働、アウトプット、自己の思考の客観視、課題設定および解決、新しい認識

・授業方法

それぞれの班で和歌と『徒然草』の美意識との関連性を調べる。

・授業の詳細

兼好法師は「和歌の四天王」と呼ばれ、和歌の世界での価値観が『徒然草』に反映されているであろう。このことに生徒たちが自ら気付ける

ように選んだ教材は、百人一首である。そのねらいは、今までの学習から日本の文学の特徴にまで掘り下げて「兼好法師の美意識＝伝統的美意識」ということに気付けることにある。

大テーマ ……百人一首と『徒然草』との美意識の比較

班ごとのテーマ……「月」「花」「恋」比較・分析方法は自由。

必ず仮説を立て、検証すること。

抽選で班を作り、テーマ「月」「花」「恋」に分け、分析した。私が提供した資料は百人一首を部立てごとに並べたものである。そこには「古今和歌集所収、平安中期、平安後期、題詠」を明示した。

A組（中学入学生）はプリントにある印から統計的な分析をおこなう班、B組（高校入学生）は数首を選んで内容の比較をおこなう班が多かった。この違いは、A組（中学入学生）は中学三年間の百人一首大会や暗唱などで一首一首の意味や背景を既に知っていたためと思われる。

〔発表概要〕

A組一班（花）

9 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

73 高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ

96 花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

**結論** この三首は「自分の老い」と悲しみを「桜が散る様子」で表す。

33 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

**結論** 33のみ「桜が散る」歌で、それを「風情がある」ものとして詠む。『徒然草』と同じ。初期。「桜が散る」ことを詠んだもの



としてこの考え方が詠歌時点から変化しなかったため百人一首に選ばれたのだろうか。そして、現代人も同じ感性を持つ。

## 二班（月）

36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿らむ

57 めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

79 秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる影のさやけさ

**結論**この三首は、兼好法師と同じ考え。

21 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

23 月見ればちちにものこそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

81 ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる

86 嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな

**結論**これら題詠（21 23 81 86）の歌が劣っているということはない。

21 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

59 やすらばで寝なましものをさ夜更けてかたぶくまでの月を見しかな

86 嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな

**結論**これらは月を詠んでいても「美しさ」ではなく、「時間の経過」

を歌っている。

## 三班（恋）

・四十三首中、片思い三十首、別れ七首、両思い六首。

**結論**片思いが多い。

・題詠十九首中、片思い十六首、振られた恨み三首、両思いは無い。

**結論**片思いが多い。

## 四班（恋）

・両思い（四十三首中十七首）は男性が多い。初期が八首、中期が八首、後期が一首。

・片思い（四十三首中十六首）は女性が多い。題詠が多い。初期一首。中期六首。後期九首。

・失恋は四十三首中十首。初期が三首、中期が六首、後期が一首。

**結論**片思いや失恋の歌が多く、兼好法師「はじめ終はり」と同じ。

恋の歌は中期のことが多い。

・出典和歌集にはばらつきがあるが後拾遺・千載からが多い。

## 五班（恋）

21 今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

53 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る

89 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

97 来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

**結論**21と53、89と97とをそれぞれ比較し、題詠（21 89）とそうではない歌（53 97）に優劣はなく、兼好法師と同じ考え。

恋の歌は、恋の楽しさだけでなく苦しさや切なさを感じられるほうがよい。「来ない人を待つ辛さ」は兼好法師と同じ。

## B組一班（月と花）

57 めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

79 秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる影のさやけさ

**結論**この二首は、雲の切れ間から出ている月で、『徒然草』と同じ。

96 花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

**結論**桜が散る様と老いていく自分の身を重ねている。

## 二班（月）

57 めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな  
79 秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる影のさやけさ

**結論** この二首は、雲の切れ間から出ている月で、『徒然草』と同じ。

30 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

**結論** 失恋の歌で「あだなる契りをかこち長き夜をひとり明かし」と同じ。

### 三班（恋）

平安中期十九首、後期十首。

**結論** 時代が変わっても恋の悩みを歌う傾向は同じ。

### 四班（恋）

21 今来むといひしばかりに長月の 有明の月を待ち出でつるかな

43 逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

45 あはれともいふべき人は思ほえて身のいたずらになりぬべきかな

**結論** 21 43 は成就した後の恋の悩み、45 は成就していない恋の悩みで、それぞれ『徒然草』「始め終はりこそをかしけれ」と同じ。

### 五班（恋）

題詠は四十三首中十九首。

**結論** 心で感じたことを詠んでいるのは題詠でも同じで、歌に優劣はなく、『徒然草』と同じ。

以上のように、『徒然草』に書かれた「花、月、恋」の「美」は、百人一首の世界と一致し、兼好法師の美意識が日本の伝統的美意識に基づくものであることを理解した。もちろん百首だけでこう断じることとは早計ではあるが、「こういう傾向があるのではないか」と仮説を立てて考え、自分たちなりの考えをまとめ上げる過程で、生徒たちは主体的に学習できた。従来の聴講型の和歌の学習では、教科書に載っている限られた数首について文法解釈をもとに教師の講義を聴くか、現代語訳したり鑑賞文を書いたりする活動などが考え

られるが、今回生徒たちは歌の解釈について、人と意見を交換しながらオリジナルの結論を出した。また、兼好法師が歌人であることに注目し、『徒然草』と和歌との単元横断型授業も行うこととなった。こうした理由から、従来の聴講型、教材ごとに分かれた単元でおこなう授業よりも、主体的・対話的で深い学びができたのではないかと考える。

【5】自分の考えを自分の言葉で書く。

・設定理由

本単元のまとめとして、自分が学んだことを確認するためにも、学んだことや考えの変化などを述べる。

・ねらい アウトプット、自己の思考の客観視、新しい認識

① 我が国の文化の特徴を捉え、自分の言葉で表現できる。

② 自分の意見・考えを持ち、的確に述べることができる。

・授業方法

次の（一）（二）について、各自で記述した。

（一）『徒然草』から読み取れる我が国の美意識

（二）一についての自分の意見

以下に、（二）で生徒が記述したものを挙げる。

新しい認識がもたらされたもの

・この授業をする前までは絶対完成しているもののほうがよいと考えていたが、変わった。兼好さんが断定「なり」を使っているほど、美しいと言っている未完成。これから先、私も未完成のほうがよいと思う出来事が起きたら今回の授業を思い出したい。（S・K）

・この授業をする前は兼好法師とは逆の考え方だったが、授業が進ん

でいくごとに「ああ、未完成のもののほうが美しいこともあるな」と感じるようになった。日本は世界のどの国と比べても繊細で細やかな心、意識、文化がある国だ。これは兼好法師や昔の人達が築いてきたものだと思う。日本の文化を担う一人として、日本ならではの伝統文化を大切にしていくと共に、入ってくる外国の文化も取り入れていくと、文化だけでなく色々なことが発展していくと考える。(K, M)

・兼好さんの考え方は素晴らしいと思う。私は新しいものや完成したものにこだわるところがあるが、未完の美を学んでから、未完成のものにも良いところがあるのでと考えるようになった。現代人として、このことを伝えたいと考えた。(R, A)

・徒然草を読む前から日本の美意識は外国とは異なるものだと思っていたが、昔でもそう変わらないものだと感じた。百人一首の分析を見る限り、ほとんどの人が同じように考えていたのではないかと私は考えた。日本は雲がかかる月、未完成の建物、少し欠けている書物、心ない人ならば無駄と切り捨てるようなものを好む。(A, S)

日本の美意識、現代人として考えること

・月や花を心で見ることと同感だ。手前に障害物があると奥行きが出ること、わざと完成させないことを知り、昔の人々の考えは素敵だと思った。昔の人が個々の想像力を大切にして生きていたということから現代人よりも想像力が高いのではないかと思った。(S, Y)

・第八十二段のように、西洋にはない、日本独特の、欠けているものや未完成のものに美を見出す意識に、日本の国民性が表れていると考えた。また、現代の美意識が変わっていても、根底にある考え方は変わっていないことを、発表を聞いて実感した。(T, F)

・私は日本人が感じる美を目にするたびに、日本人でよかったとしみ

じみする。今回の古文の授業で私は日本の美に誇りを感じられるようになった。そして、兼好さんの心で見るという行為を人それぞれが違う感覚で味わえる日本の素晴らしさに気づけた。それは国境を越えてドナルド・キーンさんとながつていて、感動するものは人の心をつかむのだと発見した。(M, S)

・昔から日本人は現実では表現不可能な美しさを心の目で空想して見る、という意識があったのだと思う。また、日本人がはつきりしないもやもやした未完成なものを好むことも理解できる。たとえば、障子を通して生まれるほのかな光は日本人の美意識にぴたりとあてはまるものだったのではないか。その温かい光は現代まで好まれている。日本人の美意識は完全には失われていない。(Y, K)

以上のように、今回の授業を通して生徒に新しい認識が生まれたことがわかる。今までの自分のものの見方そのものを客観視し、自分の中にも、現代にも、伝統的なものの見方や感じ方があることに気づけたようである。

最後に、ドナルド・キーン氏の言葉を紹介してこの単元を終えた。

ドナルド・キーン氏が今日本人に伝えたいこと、

「伝統は時々隠れている。見えなくなる。しかし、流れている。

続いている。それが日本の一番の魅力だ。」

#### 終わりに — 生徒の反応から —

従来、『徒然草』の学習者に、兼好法師が歌人であるといった認識はあまりされなかったのではないか。また『徒然草』第一三七段を「兼好法師独特の自然観」「中世の無常観」が表れた章段として扱われたかもしれない。それは言葉としては決して間違いではない。

だが、「無常観」とは何か、「趣がある」とはどういう状態か、こういったことについて、生徒たちが自分の言葉で語れるほど「血となり肉となる」学習をもたらすことができているだろうか。「歌人としての兼好法師のものの見方」をその文章から読み取らなければ、真の理解ができないのではないか。また、その「ものの見方」は日本の文学・文化とのかかわりにおいてはどのような位置にあり、その考えはどのくらい普遍性を持っているか。

これらについて「知識」として「教え込む」のではなく、「生徒たちが発見する、自らの力で獲得する授業」でありたい。

また、プレゼンテーションなどでICT機器を活用したが、特に有効だったのは違う時間の他クラスの意見を共有できる点だ。

英語科との連携・横断型授業として、那須氏から多くご教示頂いた。改めて感謝申し上げる。本授業での目的は理解の深化にあったことは前述のとおりである。たとえば、「心あらん友」は「有心」の概念を理解するために重要な言葉であるが、英訳文を再度日本語に訳すと「感動の瞬間を分かち合うことのできる友」となる。生徒たちにとって「情趣を解する友」より分かりやすい。これはひとえにドナルド・キーン氏の日本文学への深い理解と的確な表現のおかげであるが、生徒たちはさらに日本語の特質にまで目を向け、考えを自発的に発展させていった。

そして、百人一首の分析を通して、知識として「和歌」が日本文化の根幹であり、共通の価値観の基盤であったことを「体験的に」知ることができた。また、活用・態度としては、伝統的な文化を理解して愛着と誇りを持つことができ、また、人に説明できるようになった。自ら課題設定をし、その解決にむけて調べ、一定の結論を

出すこともできた。

成熟社会を生きる日本の子どもたちが、このような主体的・対話的学びを通して、課題設定・解決力・プレゼンテーション能力等自身につけることは、学校教育において喫緊の課題でもある。私たち教師は、生徒たちに、自己を豊かにするような新しい認識を促すことができているかということを常に検証しながら授業を行うべきである。生徒たちが学習を振り返り、自己の思考を客観視するのと同じように。

注

(1) 前掲の小川氏が指摘のとおり、『徒然草』での美意識は厳密に言えばあくまでも「中世での美意識」ということになる(『玉勝間』巻四「兼好法師が詞のあげつらひ」では、批判的に書かれている。)が、高校生にとってはかえって混乱を来す畏れがあるため、「歌人が持っていた伝統的美意識」として認識できることを第一の目的とした。

(2) 京都書房『新訂国語総覧 第六版』

(3) 「吉田兼好」同様、書名も古写本では「つれく種」だったものが江戸時代『徒然草』で一般化されたことが現在まで続いている。

(4) 小川剛生訳注『新版 徒然草 現代語訳付き』角川ソフィア文庫 平成二十七年三月二十五日

(5) 実施にあたっては事前に、先行研究の那須氏に多々ご教示頂いた。(那須充英「ことばへの気づき」を育てる百人一首の指導―英詩訳百人一首との比較を通じて―、全国大学国語教育学会第二九回西東京大会発表)

(6) サグラダ・ファミリアは二〇二六年に完成を目指していること、ミロのヴィーナスは意図して腕が欠けているのではないことも確認した。

(7) 司馬遷『史記』蔡沢伝。<sup>さいたく</sup>『徒然草』第八十二段にも「月満ちては欠け、物盛りにしては衰ふ。」とある。

(8) 『Essays in Idleness』チャールズ・イ・タトル出版

(9) 元享四（一三二四）年十一月兼好法師は『古今和歌集』を書写し、十二月十三日為世から古今伝授を受けている。また、『続後拾遺集』を完成させた為定を助けた。五味氏は、『徒然草』は為定を読み手として書かれた」とする。（五味文彦『増補『徒然草』の歴史学』角川ソフィア文庫、平成二十六年十一月二十五日）為定は為世の孫で、定家の五代あと。

(10) 平成二十七年十月十日放送、NHK スペシャル『私が愛する日本人へ』ドナルド・キーン 文豪との七十年』より

（てしろぎ・あやこ／北鎌倉女子学園中学校高等学校）